

子供の脊丈けの二倍にも三倍にもなつてゐましたのに震災で跡形もなくなり惜しい事をいたしました。マクレッツの挿木、バラの挿木なども面白うございました。

いろ／＼の思ひ出はつきませんがこれで筆を擱きます。今から考へましても私は随分不自然な保育もいたしました。形式に捉はれた保育もいたしました。あゝもしたらよかつたのに、こうもしたらよかつたのにご自分の研究の極めて淺さかつたこと、自分の努力のいかにも足りなかつたことを今更のやうに後悔いたしてをります。けれども萬事あごの祭り、其時の子供はもう既に立派な方々になつてゐられます。此頃でも時々お目にかゝります毎に昔の幼き姿を思ひ浮べつゝ人間の尊さをつく／＼と感じます。そして其方々が其一步一步を最も正しくかつ強く踏みしめて心身共に健かに行手遙かに邁進せられんことを祈つてやみません。



## 大 瀧 晴

この度いよ／＼大塚の新校舎が落成して、幼稚園も近々御移轉になりますさうで誠にお目出たう存じます。理想的に御設計なさつて、至れり盡せりの設備を整へられたさすがらしい建物と美しいお庭の中で、御抱負のまゝに理想的な保育を御實現になるのですから、先生方には定めし希望に燃えてお出でになります御こころ遣かに御察し申上げて居ります。

しかし私はあのお茶の水といふ傳統的なゆかしい名前も、あの高爽なああの由緒深い湯島の土地から離れておしまひになるのが、何とも言へず惜しいやうな心地が致します。

殊に私が御世話になつて居りましたのは、震災以前のこゝで、あの美しい庭、心地よい建物ばかりが印象されて居りまして、震災後の御様子がよくわかりませんので、殊の外かやうな感じが深いのかも知れません。

「お茶の水幼稚園」いふこゝ、私は何こも言へず心が清まるやうな思ひが湧いて参ります。全く凡てが清く温く明かであつたのでございます。あの御人格の高い安井先生、倉橋先生を主事と仰いで、あのおやさしい親しみ易い雨森先生、池田先生（唯今の野間先生）坂内先生、及川先生をおはじめその他の先生方を御同僚として、しかも天使のやうな幼児を相手としてお務めですから、如何に清らかで、温かで、明かであつたかといふこゝはごなたも御うなづき下さるこゝに存じます。

安井先生の御人格の御高いこゝは、今更申し上げるまでもないのでございますが、お側近く御言動を拜見する私は、全く日々敬服しきつて居りました。その頃私は父と二人で暮して居たのでございましたが、私は先生を敬慕する餘り、毎日歸宅するに、無意識の中に先生の御美德をお讃へして居たものと見えます。一體私の父は頑固な人でございまして、あまり婦人を尊敬したこゝなごないのございましたが、私の話を通して安井先生の御人格には深く敬服してゐたやうで、いつでも人に、

「安井哲子先生こそは、稀に見る人格者でいらつしやる」。

と讃嘆して語つてゐるのでございます。

先生は私共部下をわが子のやうにおいつくしみ下さいました。その一例を申しますと、先生が餘り私共を勞つて、少し仕事をしても、心から、御苦勞だ御苦勞だとおつしやつて下さるので、私共は勿體なくて、大々的な庭の手入りとか、職員室の大整理とかいふ少しいづもこちがふ仕事は、先生が本校の職員會に御出席なさつたお留守をねらつてするこゝに致して居りました。その日は先生が向ふへお出でになるのを待ちかねて、みんな總出で心を合せ、それこそ骨身を惜しみます働きます。

これはまた矛盾のやうでをかくも思はれますが——私は之を親に對する子心と解釋したいのですが——かういふ風にみんなで働いてきれいになつた跡を、先生に見て頂くのが無上の樂しみでございました。先生がお歸りになつて。

「おゝ、きれいになりました。御苦勞さんでしたね」。

ご審目美しく掃き清められた庭、黒々ご耕し出された土の面を、お嬉しさうに微笑みながら、じつご眺めて下さるのが、たごへやうもなく嬉しかつたのでございます。實に先生のあの御微笑は、數々の御美德ご共に、私の心の中に永遠に輝いてゐるやうな心地が致します。

倉橋先生も亦ほんたうに温情を以つて私共部下をお勞り下さいました。そして寛大なお態度で、私共のあやまりや、不束な點を宥しながら、御懇切にお導き下さいました。殊に御造詣深い教育學や心理學の御蘊蓄を傾けて、私共を御指導下さいましたごは、一生の幸福ご深く感謝してゐる所でございます。誠に不束ながら私の教育觀は、全く先生の御指導に依つて確立したやうに存じます。其の後私は小學校女學校ごだんご大きい生徒を相手の教育にたづさはり、又家庭に於ても三人の子女を育て、参りましたが、如何なる場合にも、先生に御教示頂いた教育觀を基礎ごして、事に當つて参りました。殊の外不敏な私が今日まで大過なく、教育者のお仲間入りをさせて頂いてまゐりましたのも、偏に先生の御導きの賜ご、いつも感謝致して居ります。

又先生の御導きの下に、色々工夫をこらして試みました保育の實際は、誠に興味多く意義深いものであつたやうに記憶致します。遊戯室の真中に四本柱をしつらひ、紅白の幕を張りまはして催した相撲遊び、小さな樽神輿を作つて、ワッショ〜ごあのお山や藤棚の下をかつき廻つたお祭り遊びなご、今思ひ出しても胸が躍るやうな感じが致します。そして頬を眞赤に染めた、可愛らしく元氣な誰彼の顔が、目前にちらつきます。

又幼いながらに藝術的態度を以つて、燃ゆる心血を注いで製作した、晝や粘土細工なごの展覽會も、誠に楽しく貴いものであつたやうに思ひ起されます。同時に幼い魂を注ぎ込んで製作にいそむ子供さん方の顔ご、藝術味あふれた可愛く面白い製作品の數々が、彷彿ごして眼前に浮びます。

さてあの頃のお茶の水幼稚園の外觀を思ひ出すにつけ、一番印象の深いのは、あの藤棚ご薔薇の垣根でございます。震

災直後焦土に化した校庭を訪れて、無憐な藤棚の焼跡を眺めた時、私は幼稚園の建物にも増して、惜しかったこいふ感じに打たれました。

保育室の窓を飾る薔薇の垣根は、全く野間先生や田中先生(當時の岡野先生)坂内先生の御努力の結晶でした。私なごもするぶんお手傳ひをして、手入を致しました。油蟲を除く爲、春の光を浴びながら、可愛い幼な兒を相手に、薔薇の一片葉をていねいに筆で洗つていらつしやる先生方のお姿がなつかしく浮んで参ります。私は小輪で可愛らしくそして香の高いあの垣根の薔薇が特別好きでした。天國のやうな幼稚園が、あの薔薇の美しさご可愛らしさを加へて、更に美化する晩春の頃が、ほんたうに楽しみでした。

私はその後方々に引越して歩きましたが、ごの家でも必ずあの種の薔薇を仕立てました。所がさうした運命でせうか、やうやく成長して花が咲くやうになるご、必ず轉住しなければならぬ事情になるのです。殊に水戸の家では特別念を入れて立派な垣根を作り、それがやつと澤山の蕾を持つた時、主人が今居ります下館に轉任の命を受けたのでございまして。私はよく、薔薇には縁がないのかご、自分の運命をかこちました。そして今度こそはご昨年はこちらで、石油箱に一ぱい凡そ五十本ばかりの挿木を致しましたら、それが僥倖にも全部根が付きまして、専門の園藝家を驚嘆させました。これは地に下さないで、あの箱のまゝ花を咲かせて、何處のはてへでも持歩いて、幼稚園の思ひ出の記念ご致したいご存じて居ります。

何しろ天使のやうな子供さん方を相手の仕事故、可愛かつたごご、嬉しかつたごご、教へられたごごの思ひ出の数々は、ごごも擧げつくすごごは出来ません。又その半面、未だわからずやの子供さん故、困つたごご、悲しかつたごご、苦しかつたごごの数々も、述べつくせない程でございしますが、

「お家に歸る、お家に歸る」。

と言つて、いくらすかしても泣きやまないお子さんをおぶつて、自分も涙をこぼしながら、あのお山のあたりをさまよつたこみや、メリーゴーランドを烈しく廻して、飛乗り飛降りなご危い藝當をするのを、いくら制してもきゝ入れられず、膽を冷しながら番をして見たるたこみや、まごかの幼稚園の園長さんが、參觀にいらつしやつた時、数日前から奈良山先生に教へて頂いて習つて置いた犬の畫を、やつまの思ひで描いて見せたら、

「先生、象も描いて下さい。象も描いて下さい。」

まみんなにせがまれて立往生をしたこみやも、今こなつては、たゞなつがしく思ひ起されるのでございます。

終に臨み誠にお恥しいこみやでございますが、私はこゝに或る子供さんから、一生忘れ得ぬ教訓を受けたこみやを告白致します。

私は御承知の通り、生來不精なたちでございますので、子供さん方から何か頼まれるこ、

「あこで、あこで。」

と言つては、一寸のがれをしてゐるものこ見えます。自分ではそれほご意識して居りませんでした。

いつか私が別に忙しい仕事をしてゐる時でもなかつたこ思ひますが或子供さんが、

「先生前かけのボタンをつけて下さい。」

こお頼みになつて、私の返事も待たずに直ぐ後から、

「先生、あこで。」

と言つて、私の顔をじつこ見上げました。あゝあの時の私の心、ほんたうにぎくりこして、胸がえぐられるやうな氣が致しました。恥かしくて居たゝまらないやうな心地で、まなたにも話し得ず、ひたすら自分の今までの不精な仕ぐさを責めてゝ後悔致しました。それから自分の怠慢な心に鞭つて、及ばずながら即時實行を心がけてまゐりました。今でも不

精な心が起ります。あの子供さんの。

「先生、あつて。」

私を見上げられた犯し難い目なざしを思ひ出して、戒めを致して居ります。

かうして書いて居ります。なつかしい思ひ出は限りもなく湧いて参りますが、紙數に限りがございますので、これです。拙い筆を擱くことに致します。

昭和七、一二、二二、雪の筑波を仰ぎつゝ、

下館の寓居にて

## 坂 内 三 三

お茶の水の幼稚園、これは一生私の頭にこびりついてこれないものであります。此度は完備した園舎が竣工して窪町に移られても私は尙お茶の水と呼ばずには居られません、其なつかしい幼稚園、私に一生の仕事を授けて下さった幼稚園に奉職したのは二十二年前の事であります。星變り時移り時勢の推移につれて保育の形式、幼稚園の空氣といふものも知らず知らずの内に變つて來たやうに思はれますが私はたゞ單に形にあらはれた二三の事について思ひ出したまゝに書いて見ませう。

幼児の服装は大正のはじめ迄は洋服を着て通園される方は數へる程でみんなが異様の目を向けた位でした。殊に入園檢定の時は體格検査があるといふので全部和服、三つの御祝に著せられ袖の長いゴロリミした風でしよふゝミ來られたものであります。男兒の中にはノシメの羽織袴に白足袋といふいでたちが少なかつたのであります。大正も十年頃になります。大方洋服になり時々和服のお子さんを見る。赤いかのこの兵古帯も可愛いものねささゝやき合つたものです。